

Title	えすぱにや、ぼるつがる記(木下杢太郎著, 岩波書店發行)
Sub Title	
Author	吉田, 小五郎(Yoshida, Kogoro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1929
Jtitle	史学 Vol.8, No.3 (1929. 11) ,p.177(499)- 178(500)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19291100-0177

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

國憲の起草を要求するに至つたかの経過を明かにして、建國以來二千五百年間の國史に於ける明治維新史國家的國民的自覺の尊き體験の意義を闡明してゐる。此の意味よりして明治維新史は日本國民の世界史的自覺の尊き歴史であつて、今後時代を経るに従つて、其の價値を益すとも、斷じて減じないであらうと自分は信ずるものである。(山本光郎)

えすばにや、ほるつがる記

(木下李太郎著
岩波書店發行)

医学博士で、歌人で、詩人で、戯曲家で、美術批評家で、南蠻づきで、又繪もかく——醫者が本業であらうが、その他のものもたゞの餘戯とはいはれまい——木下李太郎氏の存在は、眞に不思議な存在である。

氏の南蠻趣味も隨分古いことである。私が始めて氏の戯曲集『南蠻寺門前』を読んでからでも一昔はとうに過ぎたやうに思へる。その後出た『厥後集』などにも、詩情豊かな昔語りがのせられた。讀んで恍惚とした記憶が未だ去らない。

私は氏の文を好む故、何かの雄談にのればきつとよむ。此二三年來(四五年來か)氏は改造、中央公論、思想、婦人公論、岩波講座などに矢継早に南蠻、切支丹にまつはる紀行文或は論文を寄せられた。此度『えすばにや、ほるつがる記』と名づけられ、美し

い裝ひして世におくられたのは之等の文を集められたものである。『えすばにや、ほるつがる記』とは氏が大正十三年佛蘭西よりの歸途、急に西班牙、葡萄牙の旅行を思ひたゝれ、之を機會に氏の所謂、「日本に於ける天主教の歴史に關する傍業的研究」を企てられた。急に思ひたつたとはいはれても、緻密で犀利で研究熱の旺盛の氏のことだから、相當準備せられたやうである。フランスをたゞれる前あの『日本書志』の著者なるアンリイ・コルザエ氏にもあつてゐられる。

西班牙ではサン・セバスチヤン、サベリヨの生地、サラゴッサ、マドリイ市、アルカラ、トレド、コルドバ、セビイア、シマンカス、葡萄牙では里斯ボア、コインブラと日本の天主教の歴史に縁の深い地を訪はれ、其土地に關する觀察、印象がはつきり記されている。一體私は學者の紀行文を好みない。それは多くの場合、學者は折角その土地の空氣を吸ひながら、多く旅行案内の中に見られる風景と學問とを寫すのだからである。木下氏は眞に自分の目で見られたものをそのまま書いてゐられる。私は読み乍ら美しいと思つた。それから之等の土地を訪はれる度に氏の足は先づ圖書館に向ひ、日本に關する文献を涉漁せられる熱心さは驚ろくばかりである。バジエス、ウェンクステルンは勿論、コルザエにも戰つてゐない印行本或は未刊の諸書を見出された。而も其記述は微に入り細を穿つてゐる。されば此『えすばにや、ほるつがる記』は又『西班牙、葡萄牙に於ける日本史料探訪記』と稱してよからう。更に外篇として左記の十一篇の論文或は譯譯があり、而も之が全部五百三十七頁の中、殆んど四百頁を占めるのである。

日本の發見、日本に於ける吉利支丹の運動。アレッサンドロ・ソニエニ師の第二回の來朝。千五百九十年マカオに於て印刷せられたる一書に關する解題（此分メデナ氏著笠井鎮夫氏譯）。十六世紀末澳門及び日本に於ける活字出版（此分デ・フレイタス氏著岡本良知氏譯）アジュダ文庫に在る日本關係の未刊書に關する覺書。

グイドオ・ガワルチエリが日本使節記（伊東マンシオ一行の）に就いて。ホルトカルロ・スパニヤよりイタリヤへ（ガワルチエリ日本使節記の抄譯）。四遣歐使節の歸朝（此分アジュダの夫刊行書の一部を岡本氏が譯註を附せられたるもの）。支倉六右衛門の事、附アマチが『奥州記』、西班牙の風物と其國の植民傳教史（オットオ・マイアス師が西班牙記）

以上の十一篇、今一に之を紹介する暇がないが、『日本の發見』や『日本に於ける吉利支丹の運動』の記述の方法は氏獨特のものであり、又譯文の暢達、字句の洗練されたるを見るに近頃貧しい翻譯に從つてゐる筆者は、読みながらたましいやうな心持を禁ずることが出來なかつた。

なほ扉に用ひられた一五八六年刊の西班牙、葡萄牙の地圖と他四十二箇の挿入圖とは内容と相まつて私の心を射る。四年十一月二十四日（吉田小五郎）

其間の事情を記述せしもの、即ち之なり。
この「明治十五年の朝鮮事變」は後に起りし日清日露の二大戰役の導火線とも見らるべきものなり。

此の事變を惹起せし原因は、當時朝鮮半島に於ける、開化黨並に守舊黨と稱せられし兩黨派の黨争に端を發す。當時半島の政治は親政なりしも、その實、王妃閔氏竝に其の權威に左右せられし爲め、國庫も窮乏を告げ、従つて舊軍兵卒の俸料米を給與せざること、十數ヶ月に及びたるも、政府は之を顧みざる爲め、不平の聲充滿するに至り、加ふるに開化黨の爲めに地位を失ひし士、或は改革を喜ばざる徒等が積年の憤怒を雪ぐ爲めに、彼等を陰に陽に煽動せし上、更に浮浪の者等も之に加擔し、事件を悪化し、遂に内亂を起すに至れり。豺狼の如き暴徒は、七月廿三日の午後西大門外清水館なる、日本公使館を襲撃し、翌日は雲峴宮に赴き、大院君に大訴し、進んで昌德宮に闖入りし數人を殺戮し、且つ閔妃をも害せんとせしも得るところなかりき。大院君は、この期を逸せず政權を掌握し、再び攝政となれり。

一方清國にては、この政變に對し、内亂鎮撫を名とし、數千の兵を朝鮮に送り、城内の鎮撫に力め、大院君を虜し清國に拉去せり。これ所謂「壬午の政變」と稱するものなり。次に殺戮破壊横行肆虐の數限りを盡せし亂兵暴民は其の餘勢をもつて、城外の清水館なる我が公使館を圍繞し、駐劄の我が公使以の身體にせまれり。ここに於て防戦に力めしも、衆寡敵せず唯斬殺を待つのみなりしかば、一同は意を決し、廿八名一團となり、日章旗の下に、寄せ來る賊を斬り伏せ薙倒し、暫く血路を開き仁川に逃著き。心身共に

明治十五年朝鮮事變と花房公使（武田勝義著）

本年子爵花房義質翁の十三回忌に當り、翁を追想する一資料として、翁の事歴中最も記念すべき、明治壬午朝鮮事件を中心とし、